

「こころにながらぬ仏像を目指して、今日も鑿の音が響く」
江里康慧著「仏師という生き方」41頁より（廣済堂出版刊）



三寶寺寺報 第一七九号
二〇〇三年四月一日発行
発行人 目崎 薫（三寶寺住職）
伊勢原市沼目三 十二 二
TEL 0463 93 3236
FAX 0463 93 5452
購読料加金 年三〇〇〇円（年・送料込）
郵便振替口座 一〇二〇〇〇六一〇五八五三一 〒259-1126

vicara ヴィチャラー
じゅくりよ はんせい
熟慮・反省

衆生病むがゆえに我病む
（維摩経）
戦争は、勝利の目的を達成しないで、敗戦でその終結を見た。日本人は、仏法からはいつて、日本の、世界の今後を考えるべきだ。

慟哭
一発の銃声は
慟哭の民の列を生か
一滴の涙は
血の運河に変わった
知るべきだ
弱者はうねりとなる
時と人を切る
独裁者なるものよ
今からでもおそくなの
民の苦しみ悲しみを知らず
武器を捨てよ

小室孝

三寶寺掲示板 四月
人々のなかの
至上の人（世尊）よ
ふたたび世にあらわれて
人間の内にある至上のものを
破滅より救わんことを
ターゲット

花まつり
心のひらける人は、その人自身が花である。「この人をふんだり華と名づく」
「法の華」とは、人のことだろう。それゆえ灌仏の花まつりは、人の心の花をひらき、この国を花の人、あるいは「人花」でいっぱいしようとする春の大きなデモンストレーションである。だから私は、この行事を灌仏会でなく、「讃仏会」と表示したい。
大信海45号 稲津紀三著